

自我への迂路

——現象学における自我への問いの存立構造——

吉田 聡

(千葉工業大学)

私が様々な体験を持ちつつ生きているということは、私にとってこの上なく自明であるように見える。しかしこの一見すると自明な事柄は、その外見に反して、直ちに容易に理解されうるわけではない。むしろこの事柄の理解に到達するためには長い迂路を経なくてはならない。そのことはフッサールの考察によって示されている。フッサールはこの主体としての自我のあり方について、「生き生きした現在」「時間化」「機能する自我」といった概念を用いながら論じた。現象学における自我をめぐる問題は、自我（と体験）はいかに把握されうるかという考察の方法論の問題であると同時に、自我という事象をいかに理解するかという問題でもある。しかし、それは容易には安定した解答が得られない問題なのである。

本稿では、この自我のあり方について、榊原哲也『フッサール現象学の生成』（以下では『生成』と略記する）と田口茂『フッサールにおける〈原自我〉の問題』（以下では『原自我』と略記する）という両著作において展開された議論を手掛かりとしつつ考察する。これらの著作での議論はフッサールのテキストの詳細な読解に基づいて進められており、フッサールの思索の進展の理解や、自我に関する現象学的研究に対して、多くの示唆的な内容を含んでいる。またそれらは、その論述の豊かさによって、読む者に提起された問題についての新たな考察を促すという点においても、優れた著作である。本稿では、これらの著作で示されているいくつかの見解を出発点として、自我の問題について若干の考察を展開してみたい。なお本稿はこれらの著作の網羅的な紹介や検討を意図したものではなく、あくまで先述の問題に関してこれらの著作が示唆するものを筆者が理解する限りで受け取り、それを元にして考察したものである。

以下では、まず『生成』の議論を参照しながら、自我の匿名性についての語りの構造について考察する。体験を持つ主体としての自我は、反省によっては語られえない。反省によって把握される自我と体験は、一種の客体——主体として把握された客体——である。だが、それではこの自我の匿名性が問題として浮上するのはいかにしてなのか。それが私にとって思考されうるものの全く外部にあるのであれば、

そもそも主体としての自我のあり方などというものが問題になることはなく、またそれがどのような問題なのかを理解することもできないはずであろう。ここでは『生成』で提示されるいくつかの見解を、この主体としての自我の問題が問題として理解される過程を示すものとして解釈し直すことを試みる。次に、『原自我』の議論を参照しつつ、そこで取り上げられる「媒体」という概念によって、この自我のあり方について別の角度から考察する。ここでは『原自我』で「退去性」と呼ばれる媒体の本質的なあり方に焦点を合わせ、それが示唆するところを検討する。

1. 自我の自己把握の様式に関するフッサールの見解

『生成』第 III 部第四章では、「生き生きした現在」への反省の問題が取り上げられ、後期時間論の中で形成された考察方法を見定めることが試みられている。フッサールは後期時間論において、世界における様々な対象を構成する主観への問いを徹底化し、生き生きした現在への還元を行う。だが、この対象化・時間化する主体、すなわち生き生きした現在において機能する自我について何事かを把握し、記述することはいかにして可能になるのか。反省はそれを対象化・時間化されたものとしてしか把握しえないのではないか。ここでは、「時間化も同時にそれ自身、時間客観化される」と表現される認識論的な困難が生じている。『生成』では、フッサールがこれらの認識論的な困難を「存在論的アプローチ」¹によって解決しようとしたという見解が示される。「存在論的アプローチ」と呼ばれるのは、自己時間化のあり方を解明することによって、上述の認識論的な困難を解決しようとする試みである。生き生きした現在の自我は認識論的に見れば常に時間化されたものとしてしか見出されえない。だが、時間化されたものとして見出されるということは、それを時間化する、生き生きした現在の自我が存在するというを示している。このことから、「生き生きした現在は、おのれ自身を生き生きした現在として構成しつつ存在している」(Mat VIII, 56) という「存在論的言明」が可能となる²。

この「存在論的アプローチ」が「認識論的アプローチ」と統合されていくことによって、フッサールの最終的な方法論が形成されることになる。『生成』では、フッ

フッサール著作集 (Husserliana) からの引用箇所の手示は、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示すことによって行った。また、フッサール著作集資料篇 (Husserliana Materialien) からの引用箇所の手示は、Mat という略号を、フッサール著作集記録篇 (Husserliana Dokumente) からの引用箇所の手示は、Dok という略号を用い、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示すことによって行った。

1. 榊原哲也『フッサール現象学の生成』、東京大学出版会、2009年、p. 381 (以下では『生成』と略記する)

2. 『生成』、pp. 383-384

サールが1933年の草稿(AV 5, 3a-10b)で述べている「適切な反省(die entsprechende Reflexion)」という概念が重視され、これが生き生きした現在を把握する方法として解釈される。それは、「自己感触(sich berühren)」に支えられながら、〈時間化されたもの〉から〈時間化するもの〉へと遡及的に推論することによって、生き生きした現在の自我と時間化の在り方を明示する反省である。この反省によって、〈そのつどの今点において私は絶えず機能しつつ立ちとどまる自我で「在る」はずだ〉ということが洞察される³。さらに、1933年末の草稿(Dok II/1, 203-206)では、生き生きした現在において機能する自我について何事かを語りうるのは、我々が反省を反復することができ、その反復の中で把握される内容に基づいて、匿名的な自我の本質的構造を見て取ることができるからであるという見解が示される⁴。このように、ここで示される生き生きした現在への反省とは、機能する自我を感触しつつ、その自己感触に支えられた反省を反復しながら、そこで浮かび上がってくる機能する自我の本質的構造を見て取ることであると考えられる。

この自己感触に基づく反省によって生き生きした現在の把握が可能になるという見解は、次のような見方に基づいていると考えられる。すなわちそれは、生き生きした現在における自我は自己感触によって自己自身に反省以前に触れており、その自己感触に基づいた反省を遂行することで、生き生きした現在の自我を把握することができるという見方である。

2. 反省の根拠としての自己感触の検討

さて、このように理解される自我への「適切な反省」は、通常反省とは異なった新たな方法と解すべきなのか、それとも自己感触という概念を導入することによって従来の反省観が捉え直されたものと解すべきなのか。ここで、自己感触と呼ばれる事象の内実を確認しておきたい。『生成』の議論でも示されているように、自己感触は「内的意識」を受け継ぐ概念であり、反省を一般に可能にする条件として導入されていると考えるべきであろう⁵。そうであるならば、自己感触に関する記述は従来から現象学的方法として用いられている反省を支える要素について述べたものであり、自己感触の介在を強調することによって、反省に何らかの認識上の価値が保証されるわけではないことになる。したがって、自己感触に基づいていることが、対象化された自我ではなく、生き生きした現在の自我を把握可能にすると述べることはできない。

3. 『生成』、pp. 389-391

4. 『生成』、pp. 394-397

5. 『生成』、p. 391

それでは、反省が自己感触に支えられているという事態の内実とはどのようなものか。それは、体験が、常に反省されることが可能なものとして存立しているということである。私が何らかの体験を持っているときには常にそれに対して反省を遂行する可能性が開かれている。もちろんその際に、私は実際に反省を遂行するとは限らない。こうした表明を行う必要がない場合や、そもそも反省している余裕がない場合などもありうる。だが、そうした場合でも、私は自分の体験について語ろうとすれば語ることができる。自己感触とは、この自分の持つ体験について語ることができるという潜在的な状態を指していると考えられる。体験はこの自己感触というあり方において、つまり反省によって事後的に語られうるものとして存立している。このことについて時間化という概念を用いるならば、生き生きした現在は、常に時間化されうるものとして私にとって存立しているということになる。

しかし、この自己感触という事象について語ることは問題を孕んでいるように思われる。体験が常に反省可能性を持つということを、生き生きした現在における自我の自己感触が生じているという事態として理解することは可能であるかもしれない。だが、この理解が成り立つためには、反省に先立っている匿名的な自我なるものの意味がすでに理解されている必要がある。

このことに関連して示唆を与えてくれるのは、『生成』で言及されるヘルトの主張と、それに対して『生成』の立場からなされる反論である。それは自己感触に関する言明をめぐる議論である。『生成』では、〈自己感触——ヘルトの言葉では「先反省的な、常にすでになされてしまっている自己覚認」「非対象的な自己の気づき」⁶——という思想は、反省によって成立させられる〉というヘルトの記述に反して、フッサール自身は〈自己感触に支えられてこそ「適切な反省」が可能になる〉と考えているという反論がなされる。そして、「そもそも私が機能するものとしての自己を感触していないとすれば、私は、私自身への反省が後からのものであることすら、知ることができない」⁷と主張される。

このヘルトの見解とそれに対してなされた反論は、実は根本的には対立していない⁸。この反論で述べられているのは、反省は自己感触に基づいて知られ、反省の事後性という性格そのものも自己感触によって知られるということである。すなわちこの説明は自己感触がどのように働くと考えられるかに関するものである。それに対して、ヘルトの見解で述べられているのは、自己感触という事象に関する語りそのものは自らの体験への反省によって可能になるということであると考えられる。それは自己感触がどのように働いているかということではなく、そもそも自己感触

6. Held, K., *Lebendige Gegenwart*, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1966, p. 119

7. 『生成』、p. 392

8. ただし、『生成』第 III 部第四章の注 (36) で言及されているように、ヘルトの用いる表現の中には誤解を招くものがあるのは事実である。

についての語りはどのように成立するのかに関する説明である。自己感触についての語りもまた反省によって成立するのであれば、自己感触が介在することを根拠として反省以前の匿名的な自我に触れることが可能になると述べることはできない。

ここで問われるべきなのは、匿名的な生き生きした現在の自我をいかにして把握しうるかということではない。主題化する仕方では把握しえないような匿名性を持つ自我という自我観がどのように生じてきたのかがまずは明らかにされねばならない。生き生きした現在の自我が、私にとって全く理解不可能なもので、考察の視野に入ってくることができないようなものであるならば、そもそもそれは問題にすらなりえない。だが、私たちは生き生きした現在の匿名性が問題であることを理解することができる。すなわち、私たちは生き生きした現在と呼ばれているものの意味をある程度は理解している。それでは、そもそも生き生きした現在はいかに問題として浮上するのか。それはいかに思考にもたらされうるものとなるのか。この問題について、以下では、『生成』でなされている反省の反復による体験の本質把握に関する議論を手掛かりとして考察する。ここでは、体験の本質把握の過程を、反省的な把握の中から反省可能なものの領域を超え出た事象についての理解が生じる過程として解釈することを試みる。

この問題に関連して考えることができるのが、『生成』で示される「存在論的アプローチ」という概念の内実である。『生成』では「認識論的アプローチ」と「存在論的アプローチ」は最終的に自己感触に支えられた「適切な反省」へと統合されるという見解が示されている。それでは、「認識論的アプローチ」と「存在論的アプローチ」とはどのように区別されるのか。『生成』で「認識論的アプローチ」の困難とされていたのは、時間化の働きがそれ自体反省によって〈時間化された時間化〉としてしか把握されえないということであった。それに対して「存在論的アプローチ」は、時間化されたものからそれを時間化しているものへと逆行するという方法として規定される。だが、このように規定された「存在論的アプローチ」は、対象からそれに相関する意識体験へと視線を移すという意味では、「認識論的アプローチ」と同様である。おそらく両者は、それぞれが考察の目的としているものによって区別される。自己の体験へと反省し、その構造を明らかにしていくという「認識論的アプローチ」に対して、「存在論的アプローチ」では、時間化の働きそれ自体として考えられるものが反省によっては把握不可能であることを認識した上で、そのあり方を把握することが目指されるということであろう。だが、そもそも「認識論的アプローチ」が不十分なものと見なされ、「存在論的アプローチ」が要請されるのはいかにしてなのか。「認識論的アプローチ」の限界を露呈させる時間化の働きそれ自体のあり方は、そもそもそれを反省によって把握することができないにもかかわらず、どのようにして考察の枠内に入ってくるのか——ここでの問題をこのように述べる

ことも可能であろう。

3. 自我についての語りの基盤

生き生きした現在や自己感触についての語りの問題——それは、「認識論的アプローチ」と「存在論的アプローチ」の区別を可能にするものに関連する問題でもある——に関しては、「適切な反省」による自我の本質的構造の把握の過程をめぐる『生成』の議論が重要な手掛かりを与えてくれる。この把握の過程について、『生成』では次のように説明される。まず、適切な反省は、時間化された自我を手引きとして、これを時間化した機能する自我そのものへと遡行する。だが、その機能する自我は時間化されて把握される。そこで、さらにこの時間化された機能する自我から触発されてそれを時間化した機能に遡行する。このような反省の繰り返しによって〈機能する同一の自我極〉の本質的構造が際立ってくる⁹。

ここでは、体験の本質的構造の把握に関して、二重の問題が生じうると考えられる。一つは、帰納的な推論に関わる次のような一般的な問題である。反省的に知られる過ぎ去った体験に関する事柄から、体験の一般的構造を取り出すことは妥当なのであろうか。事物の本質は、事物についての観察が進むにつれて捉え直される可能性がある。こうした可能性が残されているという点では、体験や自我の本質も同様である。すなわち、反省の反復による本質直観は、決して安定した自我の概念を与えてくれるわけではない。もう一つは、こうした仕方では把握される自我の本質的構造は、結局のところ反省により把握された体験から見て取られるものであり、そこで得られるのは時間化されたものの本質的構造にすぎないのではないかという問題である。

目下のところ、後者の問題はより重要である。前者の本質把握の不完全性は、対象一般に関わるものであり、それは事物であろうが体験であろうがあらゆる対象として把握されたものに共通の問題である。それに対して、後者の問題は体験への反省に特有のものであり、いくら時間化されたものの情報を集めても、時間化するものについて何かを知ることにはならないということである。生き生きした現在の自我の本質的構造を明らかにしようとしても、そこで明らかになるのは反省によって時間化されたものの構造に過ぎず、時間化するもののあり方ではないのではないか。結局のところ、生き生きした現在における自我のあり方は隠蔽されたままなのではないか。こうした問題が残る。この観点から見れば、たとえ帰納の問題を解消しえたとしても、あるいは体験の本質を完全に把握できたとしても、依然として問題は解決しないことになる。

9. 『生成』、pp. 402–403

こうした問題点を認めた上で、なおも体験の本質的構造の把握が生き生きした現在において機能する自我の把握のために貢献しうるとすれば、それはいかにしてなのか。こうした考察は、もはや『生成』での議論の意図からは離れてしまうかもしれないが、さらに先へと進めてみたい。むしろ、この本質的構造の把握は、そもそも生き生きした現在の自我のあり方を一つの問題として理解するために前提として必要な過程と理解することができるのではないだろうか。確かに、体験と反省の本質的構造として把握されるものは、時間化されたものの一般的構造にすぎない。だが、それが時間化そのものへの遡及的推論の機縁となり、私にとって生き生きした現在の自我の匿名性を理解する基盤となると考えることは可能なのではないだろうか。

反省の反復が生き生きした現在に関する思考を成立させる過程は、次のようなものであろう。例えば、知覚体験とはどのようなものかを明らかにしようとするときには、知覚体験という種類の体験に共通する本質的要素を見出すために、知覚体験への反省が反復されねばならない。この体験の本質についての考察は、現象学の方法である反省という作用そのものについても可能である。「後からの覚認」、「自我分裂」といった反省観は、こうした反省の反復を通じて、反省作用の本質として見出されたものである。この反省観が示すのは、次のことである。反省する私は、その当の反省のうちでは把握できない。なぜなら、自分の体験を反省するとき、その当の「反省する」という作用そのものを反省することは不可能だからである。このこと自体は、自分が遂行している反省を振り返り、その一般的構造を捉えることによって明らかになる。この反省の構造には、特に不思議なことは含まれていない。指がその指それ自体を指すことはできず、目がその目それ自体を視野に入れることはできないのと同様である。だが、この反省に関する見解は、反省の反復により生じるものであるにもかかわらず、反省されるものの範囲を超え出たものを指し示している。その見解は次のような思考を導く。私が反省をするたびに捉えるものは、みな時間化（対象化）された客体にすぎず、私が現にそれを遂行している反省の作用そのものはどのような場合でも常に把握されえない。つまり、体験を現に持つ主体、反省する主体としての自分自身を反省によって把握することはできない。このように、体験と反省の一般的構造を理解し、それを前提することによって、生き生きした現在における自我の匿名性の問題が問題として理解されうるものとなる。これが生き生きした現在の匿名性が理解されるに至る思考の道筋であると考えられる。

このように考えると、生き生きした現在の自我は、そもそも体験と反省の一般的構造の理解を基盤として、その構造をモデルにして考えることによって、匿名的なものとして理解されることになる。そして、生き生きした現在の自我はいかにして把握可能かといった問題は、こうした理解が成立した後には立てられることになる。

この問題に対しては、生き生きした現在の自我は客体化されたものとしては存在せず、またそれを主題化するような把握は不可能であると述べるしかない。こうした洞察に基づくと、生き生きした現在において体験を現に持つ自我の匿名性というあり方は、何らかの反省とは異なった経路で私が自己自身に直接接近することが可能であるがゆえに理解されるのではなく、まずは通常の仕方（反省）で獲得される自我についての情報から理解されるものであるということになる。すなわち、反省によっては把握されえないという性質が、反省によって（詳しく言えば、反省に基づく本質把握によって）理解可能なものとなるのである。

これまでの考察では、『生成』の議論を手掛かりとして、次のような事柄を明らかにしてきた。生き生きした現在の自我、体験の中を生きている自我のあり方は、私にとって自明なものに見えるが、それらは主体としては把握されえず、客体としてしか把握されえない。そして、私は反省の反復により、自らの遂行する反省の一般的構造を理解するという迂路を経なければ、その自我のあり方についての思考に到達することができない。すなわち、反省の反復は、生き生きした現在の自我を直接開示するのではなく、それが持つ匿名性という問題の理解を生成させる基盤であると考えられる。ただしこの議論は試論に過ぎず、ここでの結論も試みに導かれた一時的なものであり、さらにこの議論の道筋は詳細に検討されねばならない。しかし、『生成』の議論と、そこで検討されているフッサールの思索を出発点として、自我の匿名性の問題を、問題についての語りの生成という観点から捉え直すことが可能であると考えられる。

この事態の理解に、『原自我』における原自我と「媒体」をめぐる議論は、更なる手掛かりを与えてくれる。そこで以下では、『原自我』での議論を参照しつつ、これまでとは異なった観点から考察を進めていく。

4. 媒体としての自我

『原自我』では、フッサールの自我論の検討を通して、「原自我」概念に一貫した解釈を与えることが試みられる。その考察によれば、原自我という概念は、世界が存在するという自明性よりも手前にある「最も根底的な自明性の一つ」¹⁰を表す。原自我の実相は後述の「媒体」概念などによって捉えられるが、『原自我』が提示する重要な視点の一つは、「普通の意味での「自我」に対する鋭い差異にもかかわらず、「原自我」はやはり、本質的な多義性によって、「自我」とか「エゴ」と呼ばれざる

10. 田口茂『フッサールにおける〈原自我〉の問題』、法政大学出版局、2010年、p. 39（以下では『原自我』と略記する）

をえない¹¹ということである。原自我は、通常の意味での自我からは区別されるが、あくまで「原自我」として理解されねばならない。この原自我を、世界の中の諸事物や対象化された自我および他者などに対して中立的な構成の原点として捉えることは、実状に反している。

この点で重要なのは、『原自我』で展開される「志向的変様」論を軸としたフッサールの他者論の解釈である。そこでは、自我や他者から中立的な絶対的自我が相対的な自我・他者たちを構成するという「産出モデル」¹²が批判され、自我の唯一性と、相対性・複数性とを統一的に理解する方が模索されている。フッサールの他者論によれば、他者は私の自我の意味の変様態（志向的変様態）として捉えられる。それに対して、私の自我は他者の意味に対する原様態である。この意味で自我は諸々の他者に対して唯一性を持つ。しかし、この原様態は〈変様態に対する原様態〉として変様態と「等置」されることによって相対化されてしまう。この両面を考慮に入れながら自我のあり方が理解されねばならない。

それでは、この原自我という意味における自我のあり方はどのように理解されるのか。ここでは『原自我』第二部第七章で取り上げられる「媒体 (Medium)」¹³という概念を参照しながらこのことについて考察する。この媒体という概念は、体験の主体としての自我のあり方の実相を理解するのに有効である。媒体という自我観は次のような見解から導き出される。あらゆる対象は、私にとっては、私が持つ諸体験の中で現れる。対象が空間の中で存在するものとして現れるのは、自我（と自我が持つ体験）においてである。このような意味における自我それ自体は、様々な事物と並んで空間の中にあるとは言えない。それは、空間的な世界がそのうちで現れる媒体として理解されねばならない。そして私は、媒体そのものであるがゆえに「私はある、私は生きる」という絶対的な媒体的明証を持つ¹⁴。正しい判断であれ誤った判断であれ、あらゆる体験は私にとって必然的に与えられている。何かについて思い違いをすることも、この思い違いをするという体験を私が生きているのでなければ成り立たない。

5. 媒体の退去性

だが、媒体はこうした明証性と同時に「退去性」を持つ¹⁵。媒体は客体を現れさせる媒体であり、その媒体自体が媒体の中に現れることはない。私自身が媒体である

11. 『原自我』、p. 217

12. 『原自我』、p. 210

13. 『原自我』、p. 244

14. 『原自我』、p. 260

15. 『原自我』、pp. 271–278

がゆえに、私は媒体を主題的に把握することができない。自我のあり方は、この媒体の退去性を含むものとして理解されねばならない。『原自我』では、このことが後期フッサールの草稿で述べられる「私は、私にとっての「客体」としての私自身に、つまり私の意識受動性と意識能動性の統一としての私自身に先立つ...。」(XXXIV, 229) という記述に基づいて主張される。私は、私が持つ様々な体験を反省的に把握し、この自我（と体験）に対してあらゆる対象が現れるということを経験する。しかし、そのようにして捉えられた自我と体験は媒体そのものではない。それはすでに私によって反省的に把握されるという仕方では媒体のうちで現れた客体である。このように考えると、媒体は、主題的な把握から常に逃れ去っていくものであり、またあらゆる客体から——事物や他者のみならず自我からも——区別される中立的なものであるかのように思われてくる。しかしそれは正しくない。『原自我』では、「自己超越」によって媒体が「「掴みうる」自我」としても経験されると述べられるように、媒体は「私」「自我」と呼ばれるという見方があくまで保持される¹⁶。

だが、それはどのようなことを意味しているのか。この媒体の退去性として論じられている事象を、「私」という語の使用に即して捉え直してみたい。そのために、『原自我』第二部第六章で展開されている「私」という表現に関する議論をこの問題に接続して考察する。そこで指摘されるのは次のような事態である。

「これは私であり、これも一人の私である」などと言うとき、「私（自我）」という意味は、すでに変様されている。その「意味」は、私（自我）が他の私（自我）と等置されうるような仕方では理解されている。¹⁷

「私」という語は、自分のことを「私」と呼ぶ様々な他者たちとの対比において用いられる。だから、「私」という語は先述の原様態を意味することはできない。「私」という一人称代名詞には、単に客体的な「人物」としての自己自身を指し示すのではないような用法がある。例えば、自分が何も見えないほど暗い部屋に居て、自分の身体がどのような状態にあるか確認できないようなときでも、あるいはまた自分の属性や名前などの記憶を失ってしまったとしても、「私は脚に痛みを感じる」「私は苛立っている」などと述べることは可能である。しかし、こうした「私」の使用の特性は、「私」を使用する「どの自我にも当てはまる」¹⁸ ことであり、「私」の使用においては諸々の自我主観の「等置」が前提されている。そして、「私」「自我」の原様態的な意味とは非明示的な「経験意味」であり、それは明示的な「私」「自我」という表現を用いることによって変様されてしまうと主張される¹⁹。ここで重要な

16. 『原自我』、p. 274

17. 『原自我』、p. 201

18. 『原自我』、p. 206

19. 『原自我』、pp. 206–207

は、自我に特有の要素が、一人称代名詞の明示的な使用によって隠されてしまうということであろう。『原自我』で挙げられている例を用いると、「雨が降っている」と言明するときには、当然私はそのことを知っているということを自明の事柄として暗黙のうちに理解している。だが、そのことを明示して「雨が降っていることを、私は知っている」と述べたとすると、元の文で暗黙のうちに理解されていたのとは異なった事態について述べたことになる。

私が事物や事態について何かを述べるときには、常にそれに付け加えて「私は... を見ている」「私は...を聞いている」「私は...と想像している」「私は...と考えている」といった言明をなすことが可能となる。だがそれが可能であることに留まらず、実際に、明示的にこうした言明をなすときに、それは「彼女は...している」「あの人は...している」といった言明と対比されうるものになってしまう。媒体としての私（および私の体験）は、「雨が降っている」「猫が寝ている」「誰かが叫んでいる」などと言い表される様々な事態がそこで現れる場である。しかし、この媒体としての私を「私は...している」という言明にもたらずと、それはそうした様々な事態の中の一つとして捉えられてしまう。

こうした「私」の言明の場面に照らして述べるならば、媒体の退去性が意味しているのは、私は何らかの事態に関する言明に対してこの「私は...している」を常に付け加えることができるということである。これは自己感触（自己触発）として理解される事態と表裏一体の事柄でもある。私は世界経験の媒体として様々な言明を成り立たせる。その際、私はこの媒体としての私の存立を暗黙のうちに前提している。だが、その媒体について何事かを述べようとして、私に関する言明を付け加えると、媒体は言明された事態の中から退いてしまう。そのときに、さらに「私は私が...しているのを反省している」などと付け加えたとしても、そこで述べられるのは「その人」「彼」などと対比されうる「私」についての事柄にすぎない。

だが、それでは媒体は「私」から離れたものであり、「私」「彼」「彼女」などから等距離にあるものなのかといえ、そうではない。媒体は中立的なものではなく、「私」と呼ばれるものと結びついている。それは反省され、明示的に言明されるときに「私」と呼ばれるものなのである。この媒体と自我との関係が成り立っているということは、媒体の側に身を置いて考えれば、当然のことである。媒体としての自我が、自己自身を対象化した結果把握されるものだから、それは他のものと区別され「私」と呼ばれる。しかし、こうした媒体の側に身を置いた説明が不適切であるということをも、媒体についての考察は示している。むしろ私たちそれぞれにとってまず与えられるのは、他者との対比における私である。こうした立場から考えるならば、媒体としての私は、この他者との対比における私に基づいて遡行的に理解されるものということになる。カントの自由論で提示された根拠概念の区別を援用すると、

媒体は私（と呼ばれるもの）の存在根拠であり、私（と呼ばれるもの）は媒体の認識根拠であると述べることもできるかもしれない²⁰。だが、この根拠づけの関係は平等な相互関係ではない。媒体の存在について語ることは、結局媒体の退去を引き起こすからである。媒体としての自我という自我観を十分に理解するためには、この退去性という性格の内実をさらに考えていく必要があるだろう。

媒体としての自我に関して考察するとき、私たちは何を目指していることになるのか。それは、私が現に体験の中で生きているという事柄の理解である。この事柄を指し示すために、媒体、生き生きした現在の自我、機能する自我など様々な概念が提起されるが、そのことはこの自明に思える事柄を理解することの困難を表している。その困難は、まさに考察する私、考察しつつ生きている私が、考察によって解明されるべき目的となっていることによって引き起こされるものである。本稿での議論は、この自分自身の理解のために要する迂路の一角を、『生成』と『原自我』の議論の一部を手掛かりとして照らし出す試みだったのである。

20. Cf. Kant, I., *Kants Werke. Akademie Textausgabe*, Bd. V, Walter de Gruyter, Berlin, 1968, p. 4